

ピピネラと幸福の白い花

妖精の国の花園では、色とりどりの花が咲いていました。

大きな木の根元に、恥ずかしげにかくれるように咲いていた、小さな白い幸福の花は、小鳥の羽のようなタネをたくさん実らせました。

でも、ピタリと風が止まってしまつて、タネを飛ばすことができません。

それを見ていた妖精の女王は、やさしく微笑んで、フツと甘い息をふきかけました。

するとタネは、風に乗つて雲や虹を越え、海を渡つて、どこまでも飛んでゆきました。

何日経つたことでしょうか。

タネは、美しいお城と港町で栄える、ある国にたどり着きました。

でも、多くのタネは、道路に落ちて馬車や人に踏まれたり、川に流されたり、湖に沈んだりしました。

畑や、公園や庭に落ちたタネは、せっかく

芽を出しても、引き抜かれてしまいましたが。
その中のひとつのタネは、町はずれの貧しい家の小さな花だんに落ちました。
その家には、ピピネラという美しい娘が住んでいました。
ある日、ピピネラは、花壇に小さな芽が出ているのを見つけました。
「まあ！　なんて可愛らしいのでしよう！」
ピピネラは、その芽に毎朝水をやりました。
すると、芽はグングン伸びてゆき、雪のような可愛い花をさかせました。
花は、どんな香水にも負けない上品な香りを放ち、タネを落としてどんどん増えてゆき、花壇からこぼれるほどになりました。
ところで、この国には一人の王子様がいました。
王子様は、お妃になる、心の清らかでやさしい娘をさがしていました。

ある日、王子様が町の通りを馬に乗って駆けていた時です。どこからか、とても良い香りがしてきました。

王子様は、その香りのする家を探しあて、ピピネラと出会いました。

二人はたちまち恋におち、結婚式をあげることになりました。

ところが、そのことを知った隣の国の欲張りな女王は、しつとに怒り、ドラゴンに命じてピピネラをさらわせ、山奥のお城の塔に閉じ込めてしまいました。

そして、王子様に魔法をかけて、結婚した上、この国のすべての富を奪い取ろうとしました。

それは、丸い月が美しく輝いている夜のことでです。

月の光がひとしずく落ちると、ピピネラのいる塔の中に入ってきました。

そして、涙にぬれているピピネラの顔の前

で止まりました。

それは、金色に光る羽をはやした可愛い女の子の妖精になりました。

「まあ！あなたはだれ？」

とおどろいてたずねるピピネラに、妖精はニッコリ微笑みました。

「私はミミといいます。あなたが大事に育ててくれた、幸福の花の妖精です。私が助けてあげるから、もう心配しないで」

ミミは、そういうと、ピピネラを金色の光でつつみました。

すると、どうしたことでしよう！ピピネラの白いドレスのがみるみる伸びて、夜空を横切り、王子様のお城まで届きました。

王子様は、ドレスからする花の香りをかぐうちに魔法が解けました。

バルコニーから、外を見ると、白いドレスが空から庭におりています。

これは、ピピネラのものにちがいありません。

王子様は、白馬にまたがって、空中のドレ
スの道を駆けてゆきました。
たちまち、塔が見えてきます。
王子様は、ピピネラの手をとって馬に乗せ
ました。
しかし、お城に引き返そうとしたとき、二
人にドラゴンがおそいかかってきました。
ドラゴンの背には、女王が乗っています。
ミミが魔法をかけると、馬には白い翼が生
え、流星のようなドレスを引きながら、空に
向かって飛びはじめました。
ドラゴンは、そのあとを炎をはきながらピ
ツタリとついてきます。
馬は、たくみに炎をさけ、雲を突き抜け、
月に向かって飛んで行きます。
ドラゴンが、大きく口を開けて、馬ごと飲
み込もうとしたときです。
白いリボンのように、ドレスがドラゴンに
まきついて、動きをふうじました。
とっさに王子様が剣でドレスを切ると、ド

